

博士學位論文要約

論文題目： ヒエロニムスの「ヘブライ的真理」の研究
——その聖書翻訳論と旧約引用理解とを手がかりに——

氏名： 加藤 哲平

要約：

本研究は、ラテン教父エウセビウス・ソフロニウス・ヒエロニムス (347-420) の「ヘブライ的真理 (Hebraica veritas)」の思想、すなわち旧約聖書のヘブライ語テキストにこそ真理が存するという思想のロジックを解明するものである。ヒエロニムスの思想を明らかにするために、我々は主として彼の聖書翻訳論と、新約聖書における旧約引用理解とを手がかりにする。本研究は、以下のように本論7章および補遺1章の全8章立てになっている。

第1章 序論

序論に当たる第1章では、「ヘブライ的真理」という用語に関する従来の研究では見落とされていた観点を提示した。ヒエロニムスはこの用語を、391年にベツレヘムで書かれた『創世記におけるヘブライ語研究』という注解書の序文の中で初めて用いた。この390/1年前後というのは、彼がギリシア語訳旧約聖書である七十人訳 (より詳しくは、オリゲネスの『ヘクサブラ』改訂版の七十人訳) に基づく聖書改訂を途中でやめ、ヘブライ語テキストからの聖書翻訳を始めた時期でもある。「ヘブライ的真理」という用語の初出と、ヘブライ語テキストからの聖書翻訳の開始とがほぼ同時期のことだったために、従来の研究では、ほとんど自明のこととして、ヒエロニムスは390/1年前後にそれまで信奉していた七十人訳を捨て、ついにヘブライ語テキストへ「転向」という大転換を経験した、と考えられてきた。しかしながら、ヒエロニムスの著作を具に検討してみると、彼はベツレヘムに移るより前、ローマにいた時代 (382-385年) からすでに、高度なヘブライ語の知識を必要とする議論を行っており、また「ヘブライ的真理」という言い回しでこそないものの、同様のコンセプトをすでに別の表現で表明していたことが明らかになった。その証拠の一つが『書簡20』である。ここには「真理はヘブライ語写本からこそもたらされるべき」という一節と共に、新約聖書における旧約引用が引用されている。ヒエロニムスは、これらの旧約引用が七十人訳ではなくヘブライ語テキストと一致していることを示すことにより、新約聖書の正しい理解のためには「ヘブライ的真理」への回帰が必要だと呼び掛けているわけである。それゆえに、「ヘブライ的真理」のロジックの解明のためには、ヒエロニムスの旧約引用理解が手がかりになると言うことができるだろう (第5章)。

第2章 ヒエロニムス研究史：教父とユダヤ人、そしてユダヤ教科学と教父学

第2章では、ヒエロニムスの研究史におけるバイアスについて考察した上で、本研究が取るべき方向性を再確認した。日本におけるヒエロニムス研究はほぼ未開拓の分野であるため、体系的な先行研究は存在しない。一方で、欧米においては、ヒエロニムス研究はいわゆる教父学のみならず、ユダヤ学の分野においても発展してきた経緯がある。なぜならば、ユダヤ学の前身であるユダヤ教科学における初期のラビ文学研究では、現存するラビ文学の伝承と、教父文学の中に保存されている「アガダー的要素」とを比較するという方法論が取られており、中でもヒエロニムスの著作が保存しているユダヤ伝承は特に注目されてきたからである。ユダヤ教科学の研究者たちによる、こうした情報源としてのヒエロニムスへの高い評価は、彼のユダヤ伝承の知識の深さとヘブライ語能力の高さに対する信頼によって担保されてきた。しかしながら、教父学はこの両方を疑問視したのである。すなわち、彼がユダヤ人教師から習った聖書解釈は、実

は先行するギリシア教父からの盗作であり、そもそも彼はヘブライ語すら満足に読めなかったのだ、と。言い換えれば、ヒエロニムス研究の歴史は、二つの問い——第一に、ヒエロニムスの聖書注解のオリジナリティは教父たちの間でどの程度のものだったのか、第二に、彼はどの程度のヘブライ語能力を持っていたのか——を軸に進んできたのである。これらの問いに答えるために、これまでいくつかの提案がなされてきたわけだが、本研究としては「ヘブライ的真理」という用語を突破口とする。

第3章 ギリシア・ラテン聖書学の歴史：七十人訳、ヘクサブラ、ウルガータ

第3章では、ギリシア・ラテン世界における聖書学の歴史の中にヒエロニムスを位置づけることを試みた。ギリシア・ラテン聖書学は、大きく「七十人訳的伝統」と「非七十人訳的伝統」とに分けることができる。「七十人訳的伝統」とは、ギリシア語訳聖書である七十人訳を、『アリストアスの手紙』、アレクサンドリアのフィロン、パウロと使徒、教父たち、そして古ラテン語訳などが受容してきた伝統のことであり、一方で「非七十人訳的伝統」とは、ギリシア語訳でありながらもヘブライ語テキストへと近づくことを目的として作成された諸翻訳、例えば、死海付近のナハル・ヘヴェルで発見された小預言者の巻物、三大ギリシア語訳者（アクィラ、シュンマコス、テオドティオン）などに受け継がれてきた伝統のことである。これらの両伝統を初めて統合することを試みたのは、ギリシア教父オリゲネスである。彼は『ヘクサブラ』において、両伝統に属する諸ギリシア語訳を一行に並べることで、それぞれの違いが一目瞭然になるようにした。しかしながら、ヘブライ語を読めなかったオリゲネスの関心は、究極的にはヘブライ語テキストではなく七十人訳に向けられていた。彼は、七十人訳に欠けている箇所をテオドティオン訳を混ぜ合わせることによって、七十人訳をヘブライ語テキストに近づけようとしたのである。一方で、オリゲネスの衣鉢を継いだヒエロニムスもまた、「七十人訳的伝統」と「非七十人訳的伝統」とを併せ持つ人物だったが、彼はギリシア・ラテン聖書学の歴史の中で初めて七十人訳から離れ、ヘブライ語テキストそのものに価値を見出した。ヒエロニムスの三期に渡る聖書の改訂・翻訳作業において、第一期と第二期とは七十人訳に基づいた古ラテン語訳の改訂であったが、第三期はヘブライ語テキストからの翻訳であった。彼の福音書の改訂と旧約聖書の翻訳とは、のちのウルガータ聖書の原型を用意することになる。

第4章 ヒエロニムスの翻訳論：キケローとアウグスティヌスとの比較から

第4章では、ヒエロニムスの翻訳論を明らかにするために、翻訳論の先行者であるキケローと、ヒエロニムスと同時代人であるアウグスティヌスとを比較対象とした。キケローの翻訳論の特徴は、第一に、意識と逐語訳との二項対立と、そして第二に、読者の原典へのリテラシーに基づいた意識の重視である。この二つの特徴は、アウグスティヌスとヒエロニムスの両者に部分的に受け継がれている。アウグスティヌスはヒエロニムスに対し、ヘブライ語テキストではなく七十人訳を底本として翻訳するように頼んだが、それは七十人訳が神学的な観点から「正しい」旧約聖書であるからと同時に、七十人訳がギリシア語という当時の地中海世界の共通言語で書かれているからであった。読者が原典と比較しつつ翻訳を読むためには、原典が読者の読むことのできる言語で書かれていなければならなかったのである。ただし、自身もギリシア語が達者ではなかったアウグスティヌスが想定していた読者のレベルは低かったので、キケローと異なり、アウグスティヌスは聖書の翻訳法は逐語訳が好ましいと考えた。逐語訳であれば、原典と翻訳とを単語同士で比較することができるからである。一方で、ヒエロニムスはしばしば、『翻訳の最高の種類について（書簡57）』における記述から、聖書以外は意識で、聖書は逐語訳で訳したと考えられてきたが、実際には、彼は聖書を含めて基本的に意識を旨としていたと考えた方が妥当である。なぜなら、ヒエロニムスはキケローと同じように高いレベルの原典リテラシーを持った読者を想定していたからである。すなわち、ヒエロニムスは、翻訳者が読者のために原典の内容を逐一教えてやる必要はないと考えていたのだ。しかし、彼の翻訳聖書の底本はヘブラ

イ語テキストだったので、そのままでは、ヘブライ語を知らない多くの読者は原典にアクセスすることが叶わなくなってしまう。そこで、ヒエロニムスは、読者自身がヘブライ語を読めないなら、誰か読める者、すなわち「ヘブライ人」に訊いてみればいいと述べたのである。

第5章 新約聖書における旧約引用：

ウルガータ聖書序文と『翻訳の最高の種類について（書簡 57）』から

第5章では、序論において提示された「ヘブライ的真理」と新約聖書における旧約引用との関係性を、具体的な例に即して詳細に論じた。この考察は、第4章において残された問い——ヒエロニムス自身は意識を方法論としたのにもかかわらず、なぜ彼は七十人の翻訳者に対してはヘブライ語テキストとの厳密な一致を求めるのか——にも回答を与えることになる。ヒエロニムスは、「ヘブライ的真理」のコンセプトを明らかに示している『書簡 20』を含め、全部で七つのテキストにおいて、ヘブライ語テキストと一致するが七十人訳と一致しない旧約引用に言及している（『著名者列伝』3、『エズラ記序文』、『書簡 57』7-9、『歴代誌序文（ヘブライ語）』、『五書序文』、『イザヤ書注解』3.6.9）。中でも『歴代誌序文（ヘブライ語）』は、福音書、パウロ書簡、そしてイエスの台詞（ヨハネ福音書における）と段階を踏んで旧約引用を紹介していることから、彼の議論の要約となっている。そしてこの序文で要約されている議論の全体は、ヒエロニムスが自ら『翻訳の最高の種類について』と題した『書簡 57』の中に見つけることができる。同書において、ヒエロニムスは、旧約引用がヘブライ語テキストと一致するが七十人訳と一致しない場合（マタ 2:15、マタ 2:23、ヨハ 19:37、一コリ 2:9、ロマ 9:33）のみならず、三者が互いに異なる場合（マタ 27:9-10、マタ 1:23）、そして旧約引用のみが異なる場合（マタ 26:31、マタ 2:6）をも挙げている。興味深いことに、彼は旧約引用がヘブライ語テキストと異なる場合には、それを「意訳」として受け入れている一方で、七十人訳がヘブライ語テキストと異なる場合には、それを「誤訳」として拒絶した。なぜなら、第一に、『アリストテアスの手紙』に伝えられているところによると、訳文を意図的に改変したとされている七十人の翻訳者は信頼できないからであり（それゆえに、七十人訳はヘブライ語テキストと厳密に一致しているときしか受け入れられない）、第二に、キリストの到来を過去の出来事、すなわち「歴史」として知っている使徒は、それを未来の出来事、すなわち「預言」としてしか知らない七十人よりも信頼できるからである。

第6章 ヘブライ人、使徒、キリスト：「ヘブライ的真理」を裏付ける三種の権威者

第6章では、ヒエロニムスの思想の核心に触れているテキストとして、『歴代誌序文（ヘブライ語）』を検討した。ポワティエのヒラリウスやアウグスティヌスが文献学的側面と神学的側面から七十人訳を支持しているのに対し、ヒエロニムスもまた同様のアプローチを取ることで、むしろヘブライ語テキストの重要性を証明しようとした。まず彼は、自身の翻訳が「ヘブライ的真理」を共有していることについて、権威者としての「ヘブライ人」のお墨付きを得るように読者に忠告した。第4章で見たように、彼の翻訳の読者は、翻訳と原典との比較可能性を重視していたが、ヘブライ語テキストが翻訳の底本になるとそれが叶わなくなる。そこでヒエロニムスは、読者がヘブライ語を知らないままでも自身の翻訳とヘブライ語テキストとを比べられるように、「ヘブライ人に訊け」と勧めたのである。これは文献学的なアプローチと言えるだろう。次に彼は、権威者としての使徒（福音書記者とパウロ）を通して自身の翻訳を正当化した。第5章で見たように、彼らの旧約引用が七十人訳ではなくヘブライ語テキストと一致するのであれば、真理はヘブライ語テキストに存するのであるから、それを底本とした彼の翻訳にもまた「ヘブライ的真理」が宿っていることになる。これは、預言としての旧約聖書とその成就としての新約聖書とが、旧約引用において証明されるという神学的な聖書理解に基づく議論だと言えよう。最後に、ヒエロニムスは「キリスト」であるイエスを最大の権威者とした。使徒の場合と同様に、イエスの台詞（ヨハ 7:38、マタ 27:36）もまたヘブライ語テキストと一致し七十人訳と異なるのであれば、いずれに真理があるかは明らかである。その事実は、そのままヒエロニムスの翻訳の正

当性をも裏付けている。

第7章 結論

以上の考察から、ヒエロニムスの「ヘブライ的真理」の思想とは、ヘブライ語テキストと七十人訳とのどちらが旧約聖書の翻訳として正しいのかという、二つのテキスト間の文献学的な議論だけではなく、新約聖書における旧約引用に含まれている啓示を正しく預言していたのは、ヘブライ語テキストと七十人訳のどちらなのかという、三つのテキスト間の神学的な議論に基づいたものだと言うことができる。そしてこの思想の萌芽はローマ時代の『書簡 20』(383 年)の中にすでに見られるものであった。それゆえに、通説のように、ヒエロニムスの「ヘブライ的真理」への「転向」の理由を、その用語の初出の時期である 390/1 年前後に、彼が七十人訳を捨ててヘブライ語テキストの重要性を認識したからというシナリオから説明することは正確でない。なぜなら、この説明においては、七十人訳とヘブライ語テキストのみが扱われているために旧約引用の問題が考慮に入っておらず、したがって、ヒエロニムスの神学的な議論が見落とされ、すべてが文献学的な観点から論じられてしまっているからである。旧約引用が七十人訳ではなくヘブライ語テキストと一致していることへの認識が、ヒエロニムスに、新約聖書の真理の本当のありかは旧約聖書のヘブライ語テキストであることを教えたのである。以上が、本研究の端的な結論である。

では、これらの議論を踏まえると、第2章で確認したヒエロニムス研究史における二大問題、すなわちヒエロニムスの聖書解釈のオリジナリティとヘブライ語能力の有無という問題に対して、どのような回答を与えることができるだろうか。第一の問題に関しては、本研究において扱った具体的な事例によると(ヨハ 7:38)、ヒエロニムスは確かに先行教父、特にオリゲネスの聖書解釈にしばしば依拠していると言えるだろう。一方で、ヒエロニムスがはっきりとオリゲネスの見解に反旗を翻している箇所も見出された(一コリ 2:9)。言い換えれば、ヒエロニムスのオリゲネスへの依拠は明らかだが、それは一部の教父学者たちが考えているほどに全面的なものではなかったのである。第二の問題に関しては、ヒエロニムスは高度なヘブライ語能力を持っていたと言えるだろう。それは、旧約引用の問題について論じた七つのテキストにおける議論や、より広い議論を展開していた『書簡 57』に含まれていた具体例の検証から明らかである(ヨハ 19:37、マタ 1:23)。また、自身の翻訳の正確さを知りたい読者に対し、「ヘブライ人に訊け」と忠告して、いわば種明かしをしていたことから、ヒエロニムスが自分のヘブライ語能力に相当程度、自信を持っていたことが窺える。すると、ヒエロニムスがヘブライ語能力を欠いていたというような極端な主張は、説得力に欠けていると言わざるを得ないだろう。

補遺 ヒエロニムスの生涯

本研究には、以上の本論に加えて、ヒエロニムスが本格的に紹介されてこなかった我が国の現状を鑑み、補遺として「ヒエロニムスの生涯」という章が最後に加えられている。